

令和元年6月9日現在

機関番号：32675

研究種目：基盤研究(B) (海外学術調査)

研究期間：2015～2018

課題番号：15H05160

研究課題名(和文) 諸国探検隊収集・欧亜諸国保管西域出土史料の包括的再点検による東アジア史料学の革新

研究課題名(英文) An Innovative study on East Asian historical documents, excavated by explorers across Europe in the Silk Road, through comprehensive re-examination

研究代表者

小口 雅史 (Oguchi, Masashi)

法政大学・文学部・教授

研究者番号：00177198

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、敦煌・吐魯番出土文献研究で等閑視されてきた、小断片を多く含むコレクションに着目し、それらがコレクションを越えて接続する事例を多数発見することによって、新しい東アジア古文書学を切り開くことを目的としてきた。漢文仏典、ウイグル語文書、法典文書、梵文仏典、医書、文学書など広範なジャンルにおいてコレクションを越えて接合する事例が確認され、各探検隊の行動調査とあわせて、従来より広い視点に立つ史料学的手法が確立された。

またコレクションを越えて接合する事例が生じる理由として、現地における複数の探検隊による分割購入に由来するという考え方は間違いないという結論に達した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで注目されてこなかったコレクションや新発見の出土文献群の全体像を正確に把握し、高精細画像など精緻なデータを集積しながら、断片接合事例を多数見いだしたことにより、これまで断片であるとして無視されてきた多くの史料の活用法を確立することができた。またフィンランドのマンネルヘイムの探検日記を主たる素材として、原本調査による探検隊の活動を明確にする手法も確立した。こうした手法は今後様々な分野で応用されるものと思われる。

研究成果の概要(英文)：In this research, we focus on collections containing many small fragments, which were excavated in the Silk Road, which many researchers have been setted aside a long time, and find out a large number of cases where the documents collate across collections. Thus we create a new Paleography in East Asia. There are many cases of rejoining across collections in a wide range of genres, such as Chinese Buddhist scriptures, Uyghur texts, legal texts, Sanskrit texts, medical books, and so on. In addition to that, through investigation of expeditionary party diary, we establish how to handle historical documents. It is concluded that the reason why the documents rejoin across the collections is due to split purchases by multiple expeditionary teams in the field.

研究分野：敦煌吐魯番学、日唐比較法制史

キーワード：比較史料学 吐魯番出土文書 敦煌文書 マンネルヘイム・コレクション 東アジア古文書学 シルクロード探検隊

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

(1) これまでの在敦煌・吐魯番出土文書の研究は、まとまった文献を多く含むロンドンやパリなどのコレクションを中心とするものである。一方で多数の断片群からなるベルリンのコレクションについては、断片故の扱いにくさと研究効率の悪さから、これまであまり注目されてこなかった。そのため貴重な史料が未紹介のまま埋もれていることすらあった。そこで本研究グループは、ベルリンの吐魯番出土世俗漢文文献断片群を中心に、それぞれがいかなる典籍類ないし文書類に属するものであるかについて比定研究を続け、その後もその成果を今後の新たな研究素材として学界に提供し続けてきた。

(2) こうした調査・整理の過程で、断片といえども、典籍の比定ないし文書の実態が明らかになれば、驚くべき成果をあげることを経験してきた。そうしたなかで、このベルリンの断片群と密接な関係を持つ断片群が、各地の他のコレクション中に多数存在していることに気が付いた。具体的には、ベルリンのコレクション中の断片とヘルシンキ・イスタンブル・サンクトペテルブルク・旅順などのコレクション中の断片が相互に接続する例が確実に多数存在する可能性を明らかにしつつあった。それは主に仏典を中心とするものであるが、大蔵経データベースと我々の作成した断片データベースを組み合わせることによって、断片相互の、大蔵経という巨大な史料群内における相対的位置情報を取得することで、効率的に接続統合させることが可能になってきていた。この手法を援用して、既知の各コレクション中の断片全体をデータベース化すれば、コレクションを越えて様々な断片を繋ぐことができるはずである。

(3) 以上の手法は、仏典をベースに確立したものであるが、世俗文書についても、同様のコレクションを越えた接続例が報告されつつあった。ただ世俗文書は仏典とは異なり定型文ではないため、単純にコレクションを越えた接続事例を見出すことは容易ではない。しかし仏典データによって明らかにされたコレクション相互の接続関係をもとに、コレクション相互の関係あるいはコレクション内の分類関係から、世俗文書の断片がつながる可能性を検討すべき対象を、かなり絞り込むことが可能になると考えられた。一方で、正確なテキストデータのデジタル化を促進すれば、さらにその対象を絞り込むことが容易になる。本研究グループが、これまで構築してきた内部データベース類をさらに精緻に整えて対象を拡大していけば、コレクション内はもとより、コレクションを越えて接続する断片がさらに見出されていく可能性は高いと考えられた。

### 2. 研究の目的

(1) 研究背景について上記したような、地道な作業を繰り返していけば、ベルリンやその他の大規模コレクションを中心とする吐魯番・敦煌(出土)文書・文献の新たな史料群を総体として提示することができるようになるはずである。このことは、歴史学界において他分野にも転用しうる新たな史料学の方法論の提示となるばかりか、東アジア世界における古文書研究に新たな素材を、しかも同時代の原文書という形で具体的に相当量提供しうる可能性がある。そしてこれが様々な分野の基礎史料ともなり、その研究発展に幅広く寄与できることを目指したい。

(2) 本研究では、これまで十分に利用されていない断片主体のコレクションの実態を、まずは高精細の画像付デジタル・データとして収集し、それを研究者に素材として開放すること、それに加えて漢字文献情報処理の手法、仏典解析の方法、さらには出土遺物と土地との関係を踏まえた日本の歴史考古学の手法などを総合して断片群を再整理し、原史料の姿をできるだけ復原していくという、従来の吐魯番・敦煌文書研究にはほとんど適用されてこなかった、学際的研究方法を試みることをも目的とする。こうした手法が成功すれば、単に敦煌・吐魯番学にとどまらず、他の史料群の分析にも幅広く適用できる可能性が高く、史料学の革新を可能にできるはずである。

(3) 吐魯番・敦煌学特有の問題として、各探検隊の調査記録を、史料入手の具体的経路に着目しながら相互に比較することを目指す。これはこれまでほとんどなされたことがない試みで、それによって、複数の探検隊の間でいくつかの断片がなぜ接続するのかという背景を解明することをも目的とする。

### 3. 研究の方法

(1) 調査・整理・研究の対象は、主に欧州・中国各地所在の様々な敦煌・吐魯番文書コレクションとする。これまで様々な機会を利用しておよそその調査を終えているものは、史料群の一つの中核となることが想定されているベルリン・コレクション(ベルリン国立図書館、ベルリン＝ブランデブルク科学アカデミー、アジア芸術博物館に分蔵)、ヘルシンキのマンネルヘイム・コレクション(ヘルシンキ国立図書館保管)、旅順の大谷文書(旅順博物館所蔵)などであるが、今回新たな発想に基づき、断片類の接続関係を確定するため、その補充調査を行う。

(2) またベルリンの断片との接続が確実にされているイスタンブル(イスタンブル大学所蔵)

サンクトペテルブルク(東洋写本研究所)については写真による調査を少しずつ進めてきたが、新たに、できる限りではあるがより高精細なデジタル写真を確保すると共に、実地に即した断片研究を促進する。

(3) 一方、これまで栄新江ないし西脇常記らによって、その概要のみしか紹介されていないコレクションが欧州にあり、さらには研究代表者・小口雅史のドイツ在外研究中の内部調査により、両氏が全く触れていないコレクションがまだ欧州にいくつか存在することも明らかになっている。これらについては、現地調査とその高精細写真を入手して研究素材とする。

(4) 以上をもとにして、調査終了後は、速やかに写真とデジタルテキストを整備し、総合的なデータ整理を完成し、断片接続の可能性を追究していく。こうした作業によって、既知・未知の文書群の、断片接続・統合を通じた相互関係を明らかにし、東アジア古代史研究に寄与する新しい史料群の全体像を学界に提供していく。

(5) 一方で、コレクションを越えて断片が接続することの歴史的意味について究明を目指す。その際、もっとも有効であると考えられるのが、各探検隊の調査記録の精査である。これらができる限り収集したうえで、邦訳がほとんど存在しないので、各分野の協力を仰いで翻訳を試みながら、各探検隊の行動範囲とその史料収集内容、具体的な日時を詳細に把握する。これまでの研究により、コレクションを越えて断片が接続する理由の一つとして有力なのが「購入・譲受」であることから、それらを逐一検証していく。この作業の繰り返しによって、当該問題にも確かな解答を得ることを目指す。

#### 4. 研究成果

(1) 本研究は、敦煌・吐魯番出土文献研究で等閑視されてきた、断片を多く含むコレクションに着目し、それらがコレクションを越えて接続する事例(群際接合)を、まずはできるだけ発見することを目指してきた。これまで注目されてこなかったコレクションや新発見の出土文献群の全体像を正確に把握し、高精細画像など精緻なデータを集積しながら、断片接合事例を見出してきた。蓄積してきた断片データの増加やその精度の向上と、高精細画像の活用法の向上により、接合例の蓄積を毎年着実に進めることができた。

(2) コレクションを越えて接合する事例が生じる事由を確定する作業も進み、その理由として近年想定していた、現地における複数の探検隊による分割購入に由来するという考え方はほぼ間違いのないといえるレベルにまで達することができた。その確定のために重要なフィンランドのマンネルヘイムの探検日記もとりあえず活字本で精読し、幸いにもその特別閲覧許可を得ることに成功し実現した、日記原本調査により、これまでの諸国語に翻訳された日記において見出されていた購入日時のずれをたずねることができ、従来の研究の誤りを訂正し購入日を確定することもできた。

(3) その成果の一端は、2017年11月に旅順博物館で開催された“新疆出土文献与丝绸之路”国際学術検討会において研究代表者および研究分担者全員が登壇する形で披露することができた。その成果については大方の賛同を得ることもでき、翌年、『丝绸之路与新疆出土文献 - 旅順博物館百年紀年国際学術検討会論文集』(王振芬・栄新江主編)という形で公刊された。

(4) これまでのこうした研究成果を統合すべく、2018年12月に、ヘルシンキの国立博物館、旅順博物館から吐魯番文書担当研究者を招聘し、本科研チームおよび関係研究者による合同総括国際シンポジウム「断片がつなく世界各地の吐魯番出土文書コレクション」を東京と京都とで、一般公開の形で開催し、一般参加者とともに議論を重ねて、その成果を共有することができた。

その詳細は現在準備中の出版物で広く公開する予定であるが、漢文仏典、ウイグル語文書、法典文書、梵文仏典、医書、文学書など広範なジャンルにおいてコレクションを越えて接合する事例が確認され、各探検隊の行動調査とあわせて、これまでより広い視点に立つ共同研究が必要であり、それによって群際接合する史料の増加が確実に視されるレベルにまで持って行くことができた。また戸籍類がコレクションを超えて接続する可能性も確認できている。ただし日記や探検隊の地図類は、各地にまだ膨大に残されており、その精査を進めれば、今後、新たな展開も期待される。今回の研究の最終段階において、そうした作業のための素材を一通り公表することができているが、引き続き接続例の充実拡大と探検隊日記の比較・精査を続けていきたい。

#### 5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計47件)

小口 雅史、吐魯番出土仏教資料群的調査及群外綴合、『丝绸之路与新疆出土文献 - 旅順博物館百年紀年国際学術検討会論文集』王振芬・栄新江主編、査読無、2019、436 - 445  
片山 章雄、唐代吐魯番四神靈芝雲彩画及田制等相關文書の追跡与展望、『丝绸之路与新疆出

土文献 - 旅順博物館百年紀年国際学術検討会論文集』王振芬・栄新江主編、査読無、2019、446 - 462

片山 章雄、大谷光瑞の書・入手拓本と歐陽詢、東海史学、査読有、53、2019、81 - 86

辻 正博、柏林国立図書館蔵《玉篇》残片小考、『絲綢之路与新疆出土文献 - 旅順博物館百年紀年国際学術検討会論文集』王振芬・栄新江主編、査読無、2019、567 - 572

辻 正博、唐律における流刑の本質 恩赦との關係を中心に、東洋史研究、査読有、77 - 2、2019、1 - 26

辻 正博、《政事要略》所引《會要》内容小考、法律史訳評、査読無、6、2018、125 - 137

小口 雅史、日本古代戸籍の源流・再論、『律令制と古代国家』佐藤 信編、査読無、2018、364-389

辻 正博、神田本『白氏文集』卷第三裏書に見える「會要」記事について、『中国典籍日本古写本の研究 Newsletter』査読無、4、2018、25 - 27

片山 章雄、マンネルヘイム吐魯番収集「華嚴經」(M25)諸断片、東海大学紀要文学部、査読有、107、2017、15 - 32

小口 雅史、在サンクトペテルブルク・ロシア科学アカデミー東洋写本研究所蔵世俗文書補訂 - 關尾史郎氏紹介の戸籍様文書・水利文書を中心に、法政史学、査読有、85、2016、23 - 36

片山 章雄、トゥルフアン地域の仏典断片と諸国の探検隊、東海史学、査読有、50、2016、41 - 55

辻 正博、唐代写本における避諱と則天文字の使用 P.5523 recto の書写年代について、敦煌写本研究年報、査読無、10、2016、437 - 448

小口 雅史・片山 章雄、在欧吐魯番出土文字資料の断片接続から見えるもの - ヘルシンキ・マンネルヘイム断片コレクションを主たる素材として、唐代史研究、査読無、18、2015、27 - 40

〔学会発表〕(計 29 件)

小口 雅史、本科研の目的・総括、総括国際シンポジウム「断片がつなく世界各地の吐魯番出土文書コレクション」2018

片山 章雄、漢文仏典の群外接続総括国際シンポジウム「断片がつなく世界各地の吐魯番出土文書コレクション」2018

辻 正博、敦煌・トルファン出土唐代法典文献の残存形態、総括国際シンポジウム「断片がつなく世界各地の吐魯番出土文書コレクション」2018

辻 正博、王溥『唐会要』のテキストをめぐって 研究のあゆみを中心に、六朝史研究会、2018

辻 正博、王溥『唐会要』のテキストをめぐって 近年の資料環境の変化を承けて、唐代史研究会、2018

片山 章雄、唐西州初期の墓誌中の二曆と長安史料、洛陽史料への期待、第 2 回日本洛陽学国際シンポジウム 隋唐洛陽と東アジア、2018

小口 雅史、吐魯番出土仏典資料群の調査と群外接続、“新疆出土文献与絲綢之路”国際学術検討会、2017

片山 章雄、唐代吐魯番の四神靈芝雲彩画=田制等關係文書の追跡と展望、“新疆出土文献与絲綢之路”国際学術検討会、2017

辻 正博、德国柏林国立図書館蔵 玉篇 残片小考、“新疆出土文献与絲綢之路”国際学術検討会、2017

辻 正博、《政事要略》所引《會要》内容初探、敦煌吐魯番法制文献与唐代律令秩序学術研討会、2017

辻 正博、唐史研究資料の諸問題 資料環境の変化に着目して、中国政法大学名家論壇、2017

辻 正博、《政事要略》所引《會要》内容小考、第 3 届「中国法律史前沿問題」2017

辻 正博、有關唐代編纂資料的幾個問題 以近年資料環境的變化為著眼點、廈門大学歴史系中国史系列講座、2017

片山 章雄、マンネルヘイム入手の吐魯番地域資料と諸種旅行記・書簡の記載、内陸アジア出土古文献研究会、2015

片山 章雄、フィンランド・マンネルヘイム収集の新疆資料と日独露仏の探検隊、東洋文庫東洋学講座、2015

〔図書〕(計 2 件)

富谷 至、吉本道雅、鷹取祐司、角谷常子、藤井律之、辻 正博、昭和堂、概説中国史(上)、2016、283

〔その他〕

ホームページ等

<http://aterui.i.hosei.ac.jp/oguchi/berlin/>

## 6 . 研究組織

### (1)研究分担者

研究分担者氏名：片山 章雄

ローマ字氏名：(KATAYAMA, akio)

所属研究機関名：東海大学

部局名：文学部

職名：教授

研究者番号(8桁): 10224453

研究分担者氏名：辻 正博

ローマ字氏名：(TSUJI, masahiro)

所属研究機関名：京都大学

部局名：人間・環境学研究科

職名：教授

研究者番号(8桁): 30211379

### (2)研究協力者

研究協力者氏名：辛嶋 静志

ローマ字氏名：(KARASHIMA, seishi)

研究協力者氏名：玄 幸子

ローマ字氏名：(GEN, yukiko)

研究協力者氏名：町田 隆吉

ローマ字氏名：(MACHIDA, takayoshi)

研究協力者氏名：岩本 篤志

ローマ字氏名：(IWAMOTO, atsushi)

研究協力者氏名：武井 紀子

ローマ字氏名：(TAKEI, noriko)

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。